

## ラウンドテーブル

### RT-1 (講義室 2107)

「赤ちゃんと音楽—保育の場と研究成果をつなぐもの—」

企画者：志村 洋子 (埼玉大学・赤ちゃん学会音楽部会)

### RT-2 (講義室 2108)

「『視線』から近づく赤ちゃん学」

企画者：加藤 正晴 (同志社大学心理学部赤ちゃん学研究センター)

### RT-3 (講義室 2208)

「コミュニケーションとしての模倣—乳幼児と自閉症児における鏡像模倣、相互模倣の意味」

企画者：別府 哲 (岐阜大学教育学部)

### RT-4 (講義室 2209)

「遊びの進化的、発達の起源と未来像」

企画者：高橋 英之 (玉川大学)

### RT-5 (講義室 2210)

「発達を支える親と子のバランス」

企画者：石原 尚 (大阪大学大学院工学研究科、日本学術振興会特別研究員)

## 赤ちゃんと音楽 — 保育の場と研究成果をつなぐもの —

企画者：志村 洋子（埼玉大学・日本赤ちゃん学会 音楽部会）

発表者：山根 直人（理化学研究所）

「乳児音楽知覚研究の現状と展望」

坂井 康子（甲南女子大学）

「喃語期音声のリズムと抑揚」

嶋田 由美（和歌山大学）

「『わらべうた』を通して赤ちゃんと心を通わせ合う保育」

指定討論者：小西 行郎（同志社大学）

### 企画趣旨

生後1年までの赤ちゃんの、音声言語や音楽の聴取弁別能力や表出傾向について、近年さまざまな手法で検討されてきている。例えば親が歌いかける行動は、赤ちゃんの成長に応じて変化し、こうした歌いかけを赤ちゃんはとりわけ好むことが明らかになっている。また、リズムについては成人より鋭敏にそのパターン聞き分ける可能性も示されている。これらの成果は、赤ちゃんが音楽や歌に内包されているさまざまな「感情性」に気づく力を持ち、音楽や歌を楽しみながら自らの表現力をも育んでいることが予想できる。

では、実際の保育の場で保育者はどのように赤ちゃんと音楽や歌とのかかわりを創っているのだろうか。例えば「保育」の場では、赤ちゃんであっても保育者が歌いかける際には「元氣よく」「正しいメロディ」で歌うことを求められることが多く、語りかけるように「歌いかける」というような、歌がもたらす本質を伝えようとする姿を見ることは少ない。保育の中でこそ、目の前の赤ちゃんひとりがどのように音楽を味わい、またさらに表出する力を持っているのかを、充分に知る視点を持つことが必要なのではないだろうか。

このラウンドテーブルでは、まず山根氏に赤ちゃんが音楽聴取する際どのような聴覚認知を行っているか、赤ちゃんならではの音楽聴取のメカニズムについての情報提供をお願いする。坂井氏には、赤ちゃん自身の音声表出における音楽的表現について、最新の研究成果の情報提供をしていただく。嶋田氏には、赤ちゃんに語りかける我々のことばと「わらべうた」の旋律がもつ本来の音楽性を中心に、赤ちゃんを視点にした保育の可能性を示していただく。

それらの報告を基に、小西氏から「赤ちゃん学」の視点から、音楽に関する研究成果が保育の場に示唆するものについて討論をお願いする。

このRTでは、赤ちゃんと音楽のかかわりの機序が充分理解されないまま実践されている保育の現状を、より赤ちゃんの発達や視点に寄り添ったものとすることを目指す、赤ちゃん学会「音楽部会」の現在の活動状況についても紹介する予定である。

## 「視線」から近づく赤ちゃん学

企画者：加藤 正晴（同志社大学心理学部赤ちゃん学研究センター）

発表者：麦谷 綾子（NTT コミュニケーション科学基礎研究所）

「乳児期の言語発達に関するアイトラッキング研究」

奥村 優子（京都大学/日本学術振興会）

「乳児におけるヒトとロボットからの学習」

丸山 慎（東京大学）

「乳児の音高知覚における空間性：アイトラッキングから音の知覚・認知の発達研究へ」

乙部 貴幸（仁愛女子短期大学）

「視線研究の保育への応用」

橋彌 和秀（九州大学）

「アイトラッキングだからできること・アイトラッキングでもできること」

指定討論者：開 一夫（東京大学）

### 企画趣旨

従来の乳児研究で主に使われてきた実験パラダイムである馴化法・選好注視法では乳児が2種類の画像のどちらを長く見るかという注視時間が重要視される。しかし注視時間だけが重要な指標なのだろうか。近年は計測装置の飛躍的発展もあり、単なる注視時間だけでなく、注視箇所や注視順序、刺激に対する反応潜時も容易に計測できるようになった。そのお陰で従来法では検討が難しい課題に対して、よりダイレクトに接近できるようになった。その一方で、視線計測をもちいた実験パラダイムについては、まだまだ標準的な方法があるわけではなく研究者による毎回の工夫が必要である。本企画はラウンドテーブルの利点を生かし、リラックスしたムードの中での発表と意見交換を行い、視線計測法の有効な使い方やその限界、そしてその標準化にむけたヒントを探りたい。

## コミュニケーションとしての模倣 —乳幼児と自閉症児における鏡像模倣、相互模倣の意味

企画者：別府 哲（岐阜大学教育学部）

発表者：瀬野 由衣（愛知県立大学）

「2～3歳児の仲間同士のコミュニケーション：相互模倣の果たす役割」

小川 茉奈美（浜松医科大学精神神経科医局 臨床心理研修生）

「大人による鏡像模倣が自閉症幼児の模倣認知に与える影響」

脇田 和子（中部学院大学）

「音楽によって模倣されていることに対する乳幼児の認知」

指定討論者：小島 道生（岐阜大学教育学部）

### 企画趣旨

近年、模倣に二つの機能—学習機能とコミュニケーション機能—があるとした上で、コミュニケーション機能に焦点を当てた研究が行われてきている。子どもは、学習するために模倣するだけでなく、「私はあなたに関心がある」というメッセージを伝えあうために相手の言動を模倣することがある。これは子どもの自他関係の理解を考える上でも重要な視点となる。

以上の問題意識より今回は、コミュニケーションとしての模倣を以下の点から検討する。一つは、定型発達児における相互模倣である。仲間同士での相互模倣は、相互に同じであることを体感し、テーマを共有する意味で重要な行為である。ここでは半年間、2～3歳児を縦断的に観察した事例を通してその発達の意味を論じていただく（瀬野氏）。二つは、大人による子どもの模倣（鏡像模倣、逆模倣）の検討である。大人による逆模倣が、乳児期から子どもの社会的反応を増大させること、そして2歳前後より、自分を模倣しようとしている相手の意図を認知できる（模倣認知）ことが指摘されてきた。しかし、この模倣認知が自閉症幼児でもみられるかは見解が一致していない。そこで、今回は非侵襲的な方法を用いた自閉症幼児のデータを紹介していただく（小川氏）。また、逆模倣は、子どもと同じ動作や音声で行う場合もあるが、療育・保育場面では、子どもの動作を音楽によって模倣するやり方も用いられる。しかし異なるモダリティによる模倣を子どもがどう把握しているかは従来明らかにされていない。そこで6～41カ月の定型発達幼児を対象に、音楽による模倣に対する反応を検討したデータを紹介いただく（脇田氏）。以上を、発達障害児者の心理に造詣の深い小島道生氏よりコメントいただき議論を深めることとする。

## 遊びの進化的，発達の起源と未来像

企画者：高橋 英之(玉川大学)

発表者：村井 千寿子(玉川大学)

「イントロダクション：遊びを考える」

齋藤 亜矢(京都大学)

「描画行動と遊び：チンパンジーとヒト幼児の比較から」

福岡 要(北海道大学)

「カラスの遊び行動～北海道大学における行動観察～」

宮崎 美智子(玉川大学)

「赤ちゃんの興味が「見える」ベビーアイチャットゲームの開発に向けて」

栗山 貴嗣(東京大学)

「遊びを共創する知能：赤ちゃんロボットを用いたやりとり遊びの構成論」

高橋 英之(玉川大学)

「遊びと心的帰属 -モノとヒトの境界を決める神経基盤-」

指定討論者：川合 伸幸(名古屋大学)

今井 倫太(慶応大学)

### 企画趣旨

ヒトは「遊ぶ」天才である。子どもだけではなく、大人になっても我々は多種多様な遊びに積極的に取り組み、次々と新しい遊びを創発していく。遊ぶことは一つの生きる意味と言っても過言ではないかもしれない。このようなヒトの遊ぶ能力は、衣食住が安定して保証されている環境を獲得したことによる副産物という考え方がある。その一方で、ヒト以外の動物や生まれたばかりの乳児においても、遊びに相当する行為がしばしば観測される。このような点から、遊びは単なる生きて行く上での副産物ではなく、進化や発達において重要な機能的意味を持っている可能性もある。

本ラウンドテーブルでは、動物や乳児、ロボットの遊びを様々な角度から研究している若手研究者に最新の研究成果について報告してもらうことで、遊びの定義とその機能的意味、そしてその可能性について議論をすることを目指す。そして、これらの演者に加え、進化や発達を専門とされる名古屋大学の川合伸幸先生と、様々なユニークなロボットを研究されている慶応大学の今井倫太先生の両名にも指定討論者として議論に加わっていただくことで、遊びの未来像について参加者全員で議論できるラウンドテーブルにしたいと考えている。

## 発達を支える親と子のバランス

企画者:石原 尚(大阪大学大学院工学研究科、日本学術振興会特別研究員)

発表者:小原 倫子(岡崎女子短期大学幼児教育学科准教授、愛知医科大学神経精神科非常勤心理職(臨床心理士))

「母親の情動認知と母子相互作用の変化プロセス」

森口 佑介(上越教育大学大学院学校教育研究科講師、JST さきがけ研究員)

「幼児の前頭葉機能の発達過程」

石原 尚(大阪大学大学院工学研究科博士後期課程、日本学術振興会特別研究員)

「構成論的手法による親の期待の持つ発達誘導効果の検証」

### 企画趣旨

親と子は互いに応えあい、安定した愛着関係を保っている場合に子の発達が促されると考えられ、この関係においては、親が子の発達を実感することによって子への愛情が深まってさらに応えるようになり、それがまた発達を促すという正のループがあると考えられる。しかしながら、生まれつきの発達障害や親自身の何らかの要因によって互いにうまく応えられなくなり、両者の関係のバランスが崩れると、相手にうまく応えられず発達が遅れ、その結果親への愛着や子への愛情が薄れていくことでさらにうまく応えられなくなる、という負のループとなる可能性もはらんでいる。

上記のような負のループに落ち込んだ関係も含めて親子の関係を検討し理解を深めていくことは、虐待や発達障害、養育疲れなどの大きな社会問題に対する予防や臨床での対処の仕方をさらによいものにしていく上でとても重要な試みだと思われるが、これらの問題を抱える親子に対しては臨床的なケアが第一に求められ、調査や実験の対象とすることが簡単ではないこともあり、よい関係を築いている親子に関する研究ほど進んでいないという現状がある。さらなる研究の発展のためには様々な研究領域が互いの強みを生かしあい、また弱みを補いあいながらこの課題に取り組むことが重要であると思われる。

そこでこの企画においては、親と子は互いにどのようにみつめあっているのか、そしてそのような互いの認知は親子関係や子どもの発達にどのように影響しているのか、といったことについて、臨床の場で、あるいは脳科学的手法を用いて、またあるいは工学的・計算論的手法を用いて検討を進めておられる先生方に研究をご紹介いただく。そして、今後このような各々の取り組みをいかに結びつけ、体系的に理解を深めていき、臨床への応用につなげていけばよいのか、またその上での問題は何かであるのかについて議論したい。

(この企画は科学研究費補助金基盤研究 (S)「構成的手法による身体バブリングから社会性獲得にいたる発達過程の理解と構築」の補助を受けています)